



教理試験の勉強

ワットパクナム安居

真野大成師

早いものでこちらへ来て三
パンサー（安居）が過ぎ、私
もおそまきながら、昨年より
見習い僧や新人僧に交って、
教理試験の勉強を始めました。
この教理試験はご存知のよう
に九等級に分かれた上級のパー
リ語教理の試験と、その基礎
になる三等級からなるタイ語
による基礎教理（法理・戒律・
仏伝）の試験に分かれており、
その成績は本人の能力の指標
とされると同時に、またこと

あるごとに肩書きとして紹介
され、人々が僧たちの勤勉さ
を監視する目安ともなってい
るものです。もちろん私には
上級の等級をねらうような能
力も野心もありませんが、そ
れでもタイ語の勉強を兼ね、
いずれこちらの師僧方にお話
しを伺う際にも必要となる素
養であろうと考え取り組んで
いる次第です。

ところで、今日まで日本か
ら多くの方々がタイの僧院に
勉強に來られています。残
されたものを見る限り、上座
部仏教を本格的に勉強され、
日本でその紹介・弘通に努め
ておられる方は、まだほとん

ど居られないようです。私たちは或いは、意識の底では旧来の先入観すなわち「小乗仏教」が久しい以前に大乘仏教によって乗り越えられた、幼稚な劣った考えであるとの考えから、まだ完全には抜け切れていないのかも知れません。たしかに小乗を大乘より劣った立場とするのは、歴代の祖師方のお考えでもありません。しかし、また、現代の私たちは祖師方がそのように判断された時代とは比較にならないほどの、それぞれの教えに関する資料・情報を有していません。したがって私は、はたして先人の判断が妥当・公平

なものであったのか、今一度自分自身の頭で考えてみることは、今日、決して無駄な営みではないと考えています。さらに、今日日本の仏教は、遺憾ながら心の拠り所を求める人々の要求に次第に真正面から応えなくなってきたいます。そして、そのような既存の宗教に絶望した人の中には、怪し気な教えに惑わされ、ついには半社会的な行為に走る人々も少なからずいます。従来、小乗仏教として軽視され日本ではまだほとんど知られていないと言つてよい釈尊の元々のお教えを、今日の文脈に即して人々に説き示す

ことができれば、それはまた、このような文化の現状に照らしても、大いに意義のあることではないかと思つています。以上のようなことで、私はなお暫くこちらで研鑽を積んで参りたいと思つております。不慣れな言葉での勉強に四苦八苦した一年ではありましたが、お陰様でつつがなく過ごさせて頂くことができました。本年は育英会から三名の留学僧が新たに来られるというところで、少しは兄貴面ができるかなと、今から楽しみにもしております。

発表した論文を発売

北米禅仏教学研究所所長

市村承秉老師

北米禅仏教学研究所は、創立以来七度目の新年を迎え、年来を通じてご協力を頂いた諸山、諸研究所並びに諸々の善知識にたいして心から御礼申し上げます。

年来懸案であった英訳『宗祖としての道元禪師』は、今年中研究所紀要シリーズ第三号としていよいよ発行される段階に至りました。英訳並びに出版発行に対する諸般のご後援に対して深甚な感謝の意

を捧げる次第です。

特筆できる昨年の研究活動には、三月下旬西安の北百キロに所在する銅川市と、中国国際玄奘研究会との共催による第二回発表会（第一回発表会は一九九三年夏）に出席し、玄奘の最後の翻訳事業として知られる大般若経六百巻が完成されたと伝えられる玉華宮跡に、銅川市玉華博物館並びに玉華玄奘記念館が建設されましたが、その開館式に参列しました。七月下旬には台湾の国立政治大学で開催された第十一回国際中国哲学学会に出席し、八月下旬にはホノルルで開催された第九回国際真

宗学会に参会、そして十一月初旬には、ベナレス・ヒンズー大学のインド中央政府及び地方政府共催による第二回国際仏教研究会に参加したこと等です。発表した拙論の題目はそれぞれ以下のごとくですがいずれ拙論集として発刊の予定です。

「中国仏教文化の見地より羅什の『大明呪経』に比較して見た玄奘の『般若心経』」
「今世紀並びに二十一世紀における仏教教判研究（特にブルーノ・ペッツォルドの『仏教教判論』に関連して）」
「観音菩薩信仰と阿弥陀仏」
「ストア学派倫理哲学と比較してみた上

お袈裟の会、週末の正法眼蔵研究会等、日本側からのご協力のお陰をもち実現の運びとなりました。

中でもその中心となりますのは、九月に当山が主催し、ミュンヘン市文化センターと普門寺で行う宗祖道元禅師ご生誕八〇〇年慶讃の特別記念講演並びにシンポジウムです。これを機として、今後は仏教センターだけでなく、大学等、様々な教育・研究機関とも積極的に交流し合い、布教の裾野を広げていく所存でおります。

習得した仏法を活かし

平和に貢献

駒澤大学聴講生 涂 美珠様

私は仏教を学ぶために留学し、十二年間駒澤大学で学んできました。その締めくくりとして『比丘尼パーティモツカの研究』と題した博士論文を一九九九年十月に提出し、幸いに二〇〇〇年二月に合格判定を頂き、三月に博士号が授与されました。

第十六回留学僧育英僧に採用されたことを感謝しています。当初、駒澤大学仏教学部研究員をもって募集し、

採用して頂きました。しかしながら十二年度駒澤大学研究員は不採用となりました。なぜなら大学院を終了した者は直接に研究員となる例がなかったからです。とりあえず半年もしくは一年という間をつくり、再出願するように勧められました。こうした事情を指導教授奈良康明先生に報告したところ、「せっかくここまで勉強してきたので、何とかありませんか」とおっしゃいました。その他にも奈良康明先生のご助力を得させて頂きましたが、厳しい現実には直面しました。とりわけ博士号を取った場合、一年以内に博士

